何かに気づいて、眼が覚めた。
弟の智(とも)が、タオルケットを腹にかけて静かに寝息を立てている。
網戸にした窓からは、風がレースのカーテンを揺らしていた。月の光が差しこみ、私たちの寝室兼勉強部屋を、うっすらと照らし出している。
キリギリスやウマオイがきちきちと鳴く声が、庭先から聞こえていた。遠くの田んぼでは、お経のようなカエルの合唱が響いてくる。
私の眼を覚ましたのは、もっと違う音、いや声だった。
耳を澄ます。
虫やカエルの鳴き声しか聞こえない。
ううっ。
頭がしいんと冷える。確かに、そんなうめき声が聞こえた。
眼を閉じて、聴覚に集中する。
くうっ……ああっ……いいっ……。
奇妙な声は、一定のリズムで自然の音に混ざってくる。
祖父か祖母が発作でも起こしたのか、と心配になったが、苦しんでいる声とは何か違うような気がした。
ひとが、どんなときに出す声なのか判らなかった。
ゆっくりと身体を起こして立ち上がる。夏用の薄い布団をそろそろと踏んで、ふすまに手をかけた。
喉が渇き、つばをごくりと飲みこむ。
音を立てないように、ゆっくりとふすまを引いて廊下に出た。
虫たちの歌が遠くなる。
うんっ……あっ……あっ……。
うめきは、いっそうはっきり聞こえてきた。声を出すモノは、家の中にいる。急に怖くなり、部屋に戻ろうかと思った。
しかし、怖いのに、この声を聞いていると、なぜか頭がぼうっとして、鼓動が速くなってくる。
声のする方へ、一歩踏み出す。廊下がぎしりと鳴った。素足の裏に、汗が

にじんでいる。
あはあっ……だめっ……もうっ……。
声は、音には気づかなかったように、続いていた。
廊下で汗をぬぐうように、すり足で静かに進んでいく。心臓が、痛いほど強く打っている。
廊下は、私の部屋からもれる月光で、闇をほんの少し薄めていた。
やがて、父と母の部屋の前にたどりつく。声は、明らかにふすまの向こうから聞こえていた。
女の声だった。十年ちょっとの人生の中で、こんな声は聞いたことがなかった。母が、こんな声を出すとは思えなかった。何が、部屋の中にいるのだろうか。
鼓動は今にも胸を突き破りそうなほどに強く、手のひらはじっとりと濡れていた。気づかないうちに、呼吸が大きくなっている。
ふすまが、ほんの少しだけ開いていた。私は、街灯に惹かれる虫のように、のぞきこむ。
「それ」が何なのか、最初は判らなかった。
腰から下がひとつ。上半身がふたつ。そんな動物が部屋の中にいた。
女の顔をした身体が、前足を折って顔を布団に押しつけ、尻を突き上げていた。
男の顔をした身体が、背後から両手で女の脇腹をつかんで、前後に激しく揺れている。
その動きに合わせ、女の口からきれぎれのあえぎがもれる。しかし、声の中には苦しさだけではない、何かが混ざっていた。
ほのかな月の光が、部屋をわずかに照らしている。動物の顔が見えた。
女は母だった。男は父だった。
父の力で、母の身体が揺さぶられている。父は、何度も何度も腰を母の尻に打ちつけていた。
なぜ父がそんなことをするのか判らなかった。

なぜそうすると母があんな声を出すのか判らなかった。
父が、母をいじめているのだと思った。
初めて眼にする、父の男としての力が怖かった。
と、父の動きが止まる。
母は尻を上げ、顔を伏せて激しく息をついていた。
父が離れる。息が止まりそうになった。股間から、太くて長い肉が立ち上がっていた。
五年生になってすぐ保健体育の授業があったし、父と一緒に風呂に入ったときに見ていたから、ちんぼのことを少しは知っていたが、あんな風になったちんぼを見たのは初めてだった。父が、何かをぼそっとつぶやく。
「うん……」
母はうなずくと、布団に仰向けになり、両膝を曲げたまま脚を開いた。股の間に、父が身体をねじこむ。
父は反り返ったちんぼを母の股にこすりつけていたが、驚くべきことが起こった。
ちんぼが、母の身体の中へと入っていくのだ。
「あああっ……！」
同時に、母が声を上げる。父が、胸と胸を合わせるように身体を重ねた。母は、背中をぎゅっと抱きしめる。そして、見たこともない激しいキスをした。
母は、いじめられていたのではなかったのか。
「ああっ……はあっ！」
父の腰の動きが速まると、母は嗄(か)れた声をあげ、時々息を止めたかのように黙ってしまうときがある。
母の声は泣いているときのように潤み、眼もぎゅっとつぶって何かを我慢しているように見えたが、明らかに嫌がってはいなかった。それどころか、悦んでいるのだと思った。
母の声や表情と、父の力強い動きを見ているうちに、腹の奥がぼうっと熱

くなってきた。股がむずむずする。
パジャマのズボンに、手を滑りこませる。パンティの上から、そっと撫でてみた。
じんわりと、湿っている。確かめるように、こすっていく。熱くて、うずうずする。
「は……あっ」
息がこぼれてしまう。もっともっと、さわっていたかった。だんだん、こする指に力が入ってくる。もやっとした何かが、おなかの底に溜まってくるような気がした。
パンティの布一枚の厚さがもどかしい。パジャマの中でパンティを下げ、脚の付け根へ指をのばす。指先が、こりっとしたものにふれた途端、電気のような強烈な痺れが走った。
「あうっ」
膝をついてしまう。慌てて父と母の様子をうかがうが、父は母に、母は父に没頭していた。
指がぬるぬるだった。見てみると、指の間に粘液が糸を引いていた。
おそるおそる、今度はそうっと指を置く。ぬちゃっと湿った音がした。ゆっくりと、滑らせるように指でなぞる。もやもやではなく、背骨を何かが一気に駆け上がる。
「こ、これ……」
あまり強くはできない。けれど、この感覚をもっとむさぼりたかった。
ゆっくりと、指の腹で熱い沼をこする。
「う……んっ」
指が、割れ目に沈んでいく。徒競走をするときより、鼓動が速い。
指先を立てた。
つぷっと、怖いほど深く沈んだ。
「ひいっ」
慌てて指を抜いて、悟った。父のちんぼは、きっとここに入っているのだ。

父と母の身体がひとつになり、同じリズムで前後に揺れている。それは、父の動きに母が合わせているように見えた。

父の速度に合わせて、粘液で溢れたくぼみをこすりあげる。そこから熱がじわじわと広がり、もう身体を起こしていられないほどに力が抜けていく。それなのに、頭が白熱するほどに痺れ、指は意志と関係なくこの感覚を引きずりだそうとする。

とうとう廊下に横たわり、眼だけでふすまのすきまから覗き続ける。パンティの中の指は、別の生き物のようにうごめいていた。

父が今までにない速さで、腰を母の股に打ちつける。

「〜あ〜ああっ！」

母が悲鳴のような声を上げ、父の背中にしがみついた。父は母ごと、力強く身体をゆすり続ける。

私の指も、父が乗り移ったかのように激しくかき回す。

「うっ！」

父のうめきと同時に、びりびりびりと電気が全身を駆け抜けた。

「う、あ――――っ！」

母が切なげに高い声をあげる。父は、腰を押しつけたまま、母を抱きしめていた。

「お父さん……」

うつろにつぶやいた声は、ふたりには届かなかったのか、重なり合ったままこちらを向くこともない。

父と母は、長いキスをした。さっきの激しいものではなく、愛しさを確かめあうようなしみじみとしたキスだった。

胸の奥が、ちくりと痛む。それ以上見ていたくなくて、パンティをゆっくりと引き上げた。粘液がべったりと付いて気持ち悪い。手もべたべただった。音を立てないように、廊下をトイレへと這っていく。

手を洗い、下着を履き替え、部屋に戻る。智は何事もなかったかのように眠っていた。私もタオルケットをへそまで引き上げる。

眼を閉じると、鼓動の余韻をはっきりと感じた。指を、鼻に近づける。十分洗ったはずなのに、ほんのりと甘い匂いがした。